私って、、、事故ってNARUTOの世界に来ちゃいました！？

魔遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私って、、、事故ってＮＡＲＵＴＯの世界に来ちゃいました！？

【Ｎコード】
Ｎ２０４７ＢＡ

【作者名】
魔遊

【あらすじ】
つい事故って死んじまった女の子。
でもって気づいたら！
そこはＮＡＲＵＴＯの世界！！
「私は死にたくないもん。」
陽気な彼女は一番の曲者・・・・・・？
そんな中で起こる出来事。

彼女はこの世界をどう修正していくのか？

第零章　其の零　零と紅の会話

「ったくさぁ、何でこんなめんどくさい時に書類片付けなきゃいけないのー？」

「・・・くずくず言わず、やってください。」

ここは暗部の仕事場。
昼のだけど。

「・・・へぃへぃ。イタチくんはえらいねぇ。真面目でさ。・・・それが仇にならないでね。」

「・・・ご忠告ありがとうございます。」

「はい。終わったー。」

「相変わらずはやいですね。・・・やる気を出すと。」

「・・・それは、イヤミかな？イタチくん。」

「・・・仕事してるときは、暗部名で、読んでください。零隊長。」

「む、さけたな。」

これは、私がナルトに出会った日の昼の事。つまり私が、まだ、暗

部の総隊長をしているときの事だ。
零はもちろん私。
つまり、暗部名だ。
で、目の前にいるのが、うちはイタチくん。のちにクーデターを起こそうとする彼の一族を抹殺し、抜け忍になることになる。
今は、うちはと木の葉の二重スパイをしている。

・・・ま、その原作の最大点を変えようと私はしているのだけれど。

「イイじゃん。別に。イタチくんも私も面、とってるんだし。ついでに結界も張ってるんだし。」

「・・・もぅいいです。」

「あｆ＾＿＾；）ごめんってば。紅（べに）。」

まぁ、私は、面とっても、素顔じゃないから意味ないけど。
ちなみに、紅は、イタチくんの暗部名。

「ところでさ、イタチくん。副隊長になるか、私の代わりに総隊長になるか、考えてくれた？」

また、イタチくんと呼んでるのは無視して。副隊長か総隊長になれば、一族抹殺なんてしなくてすむし、汚名をかぶらなくてよくなる・・・かもね。
彼は、平和をこよなく愛している。

そのためなら、一族抹殺任務なんて、ためらうことなくやってのけるだろうから、できるだけ止めたいし。
・・・それに、今、副隊長がいないから、ほとんど、イタチくんがやってくれてる。
・・・でも、答えは分かってるんだけど。

「お断りしようと思っています。」

・・・やっぱり。彼は控えめすぎるのだ。
どうせ、自分には、出来ないなんて思っているのだろう。
一発言ってやりたいもんだが・・・口には出さない。

「そっか、わかった。」

「すみません。」

「いいよ。でも、相談にはおいでよ?」

「ありがとうございます。」

とか言って、絶対、来ないんだから。

「さぁ、任務行って来るわ。」

「お気をつけて。」

「紅もね。」

そして、このあとナルトに会う・・・・。

それぞれの運命はいかに・・・？

第零章　其の零　零と紅の会話（後書き）

初めまして。
全然終わらない小説を書き続ける魔遊です。
ＮＡＲＵＴＯが好きだったので書いてみたんですが、あんまり原作を知らないという・・・。
矛盾がありまくりの小説ですが、読んでいただけると嬉しいです。

第一章　其の壱　原作主人公とご対面！！

ふあぁー疲れた。

あっ初めまして。

崎戸紫衣榎と申します。

えとですね。

今、私は任務の帰りで疲れてたりするんですね。はい。何故こうなったかというと、三代目火影から命令されたのはいいんですが、これが結構長引いてしまいまして・・・。

って、そんなこと言ってる場合じゃない！

実は私、この世界にトリップして来ちゃったんですよ！！元々中学一年の十二歳なんですが、学校帰りに事故に合いまして・・・。あの時の友人の顔はそりゃあもう・・・。

ってそうじゃなかった。

そしたら、漫画やアニメにもなっているＮＡＲＵＴＯ世界にいたっていう！！私が大好きな世界に！・・・？

まあ、肉体は来てないんですけどね。精神だけ飛ばされて目が覚めたら赤ん坊だったっていうオチ。

なんというか、口が開いたまま閉じることなんて出来なかったっす。

ホント、嬉しいのか・・・嬉しくないのか・・・。

で、元々精神年齢は十二歳。今現在の肉体は五歳なんで、合計十七

歳。
暗部の総隊長してたりするんですねぇ。
こんな小娘が。
こんな五歳児が！！
・・・あっ、ちゃんと変化してるんで！
だけど肉体の名前は一緒でも、名字は違うんだよね・・・。
こっち（ＮＡＲＵＴＯの世界）では瑜蘿っていうんだけど。つまり、瑜蘿紫衣榎ってこと。名字は代わっても、名前が変わらなくて良かった～と思ってます。まぁ、
ただ、この世界でも、両親死ぬわ、妹死ぬわ、一族から嫌われるわ。
大変っすよ。
仕方ないんですけどね。
私、瑜蘿一族に代々封印されている尾獣の一つの零尾の人柱力だから。
（この世界では、零尾は人の形です。）
ってめんどくさい話はやめて、自己紹介も終わって帰ろう！！

・・・ってあれ？なんか人影が・・・。
やめてよ！お化けとか幽霊とか苦手なんだから！！
・・・と言いつつも、近づきたくなるのが人間の本能。
大丈夫！お化けも幽霊もいないんだから！！
・・・と思う。
「あの・・・誰かいるの？」
「！・・・姉ちゃん。誰だってばよ。」
あれ、この声もしかして・・・。
「うずまきナルト？」
「！」

「あっ逃げないで！」

普通の走りにしては速いな。修行を積んだ忍なら別だけど・・・。

でも、かなり大きな声で止めたんだけど、声の主が止まってくれる気配はない。まあ、それなら仕方ないか。

「うわ！」

いきなり私が目の前にくるから、驚いちゃった。

だって私の方が早いんだもん。

当たり前だよね。

「姉ちゃん、忍なのか。」

「・・・そうだよ？見てわからない？」

「・・・なんで着いてくるんだってばよ。俺は・・・いらない子なんだろ。化け狐ってみんな言って・・・。どうせ、俺なんか・・・！」

「・・・そんなこと、ないよ。」

「嘘だ！みんな・・・言ってくる！」

「俺なんかいらねぇって！！」

「・・・なら、みんなが間違ってるんだよ。」

「え・・・？」

どう？この皆が間違っているよ説（笑）

「ナルトくんのことを、思ってくれてる人は絶対いるはず。違う？」

「・・・ジッちゃん・・・エロ仙人・・・。」

・・・落ち着いたみたいだね。

「初めまして。私、瑜蘿紫衣榎って言います。見ての通り、暗部に入ってて、総隊長をさせてもらってます。あっでも、元々はナルトくんと同じ五歳児だから。

で、いきなりなんだけど、暗部に入らない？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ー

「は？」

あー・・・、今のは長かったね（笑）

「だって、私が暗部ってバレたからには、ナルトくんを殺さなきゃいけないんだもん。」

『秘密を守る為にね。』

自分で暴露しててなんだけど。

それにナルトは知らない。

自分が人柱力だってことを。

・・・たとえ秘密を守るためといっても、私の勝手な判断で人柱力を殺す訳にもいかない。

・・・それがたとえ、暗部「総隊長」だったとしても・・・。

ナルトは木の葉を変えて行く「英雄」なんだから。

「でも、殺すのは嫌だし。記憶を消してもいいけど、どうせ、アカデミーで会うから、その時に思い出してもらっても困るし。一番いいのがその方法なんだよね。」

「でも、暗部って強くなきゃいけないんだろ？」

「もちろん。そのために修行をつけるつもり。でも、ナルトくん。結構できるんじゃない？」

・・・・・・ー色々と？

「！なんで知って！？っ！！」

「ははっ！図星だ！さっき、私がナルトくんに気づくまでは、気配を消してたでしょ。
あそこまで完璧に気配を消そうすれば、熟練の忍でも難易度は高いんだから（笑）
つまり、かなりの技術が必要ってこと。
でも、それをやってのけてるってことは、ある程度のことはできるって証拠だよね。
それに、私から逃げようとした時、かなりのスピードで走ってたじゃん。ドベのわりにはでき過ぎてるでしょ。」

・・・・・・いや、まだドベではないか。

「・・・だから、か。なら、なんで・・・！」

「ナルトくんがいるのが分かったかって？」

「・・・うん。」

「う～とねぇ、人影が見えたから。」

ま、嘘だけど。一応私も、暗部の総隊長やってますから、ナルトくん以上の忍とも戦って来てる。
見つかる前に見つけなければ殺される。

そんな境遇にいるからには、ナルトくんぐらいのレベルで手間取ってはダメなんだよ。言い方は悪いと思うけどさ。

「そういうことか。俺もまだまだ甘いわけだ。」

確かにね。

「・・・名前、なんてった？」

「（口調が変わった。）紫衣榎、瑜蘿紫衣榎。」

「紫衣榎・・・か。」

「どうかした？」

「いや。君付けじゃなくていい。俺も普通に読んでるから。」

「・・・・・・分かった。」

わぁ～いわぁ～い！
スレナル？だ～！
ＮＡＲＵＴＯで一番好きなキャラなんだよねぇ。とまぁ、喜んでいるのであります！！
・・・でもあれ？スレナルってことは、原作のナルトとは違うってことだよね。
今初めて気づいたんかい！ｂｙ作者

うるさいなぁ。仕方ないじゃん。私、バカなんだから。

「紫衣榎？」

「え？あ、何？」

「・・・いやなんでもない。俺に修行を。」

「了解！」

思わず敬礼してしまった私（笑）

これがナルトと関わるきっかけになった日のこと。
私は、これからの日々が面白くなりそうだと思いつつ大変になることも考えて、
目の前にいるナルトに笑いかけた。

今更の主人公設定&周りのメンバー（前書き）

今更の主人公設定です。

今更の主人公設定&周りのメンバー

瑜蘿（ユラ）　紫衣榎（シイカ）

この物語の主人公。

幼い頃、ある事件で家族を亡くしたことと、零尾の人柱力と言う以外、木の葉の里の情報帳にもほとんど載っていないほどの謎の多い女の子。

以外と曲者（笑）

瑜蘿一族の元次期頭首。

異世界からのトリップ者だったり。

ＮＡＲＵＴＯの物語（ある程度）を知っていて、自分に関係のある出来事をなるべく変えて行こうと思っている。

（見ててもあんまり分からない）

暗部名は零（れい）。

この物語の設定では、五歳から。

注意）劇場版ＮＡＲＵＴＯ　絆　に出てきた・・・と思う零尾とは違います。

出てきてなかったら、すみません。

うずまき　ナルト

第二の主人公。

原作とは違い、微妙にスレている・・・ような。

ちょっと違うか。

最初は喋り方が原作と違うが、記憶喪失になってしまい、同じ喋り方に。

と言いつつも、表の喋り方は原作での元の喋り方だったりする。

九尾の人柱力で、木の葉の里の者からはいじめられている。

のちに暗部の総隊長になったり。

とにかく強い。（……と思う。）
暗部名は朔（さく）。
この物語の設定では、五歳から。
第七班のメンバー。

うちは　イタチ
主人公の暗部での部下。
仕事をしてくれない主人公のことを、たまに呆れてたりするが、主人公を尊敬している。とっても優しく、いいお兄ちゃんである。
写輪眼を開眼している。（万華鏡写輪眼は開眼していない。）
原作では里抜けしているが、里抜けするのかは不明。
暗部名は紅（べに）。

奈良（ナラ）シカマル
スレたっぽいナルトに冗談でいじめられたりする、奈良一族の息子。
口癖はめんどくせぇで、アカデミーをよくサボってたりするが、頭はキれ、やれば、成績も上に入る。っていうか、木の葉のトップレベルの頭。
だが、頭がキレることを隠している。（色々とめんどくさいらしい。）
のちに暗部の副隊長になったり。
なにかと、ナルトや紫衣榎を支える。
いつもそばにいるヒナタに思いを寄せていたためヒナタと付き合うようになる。
ＩＱ２００！？だったりする（笑）

日向（ヒュウガ）ヒナタ
恥ずかしがり屋の日向一族の娘。
原作ではナルトが好きだが、この話のヒナタはナルトへの気持ちが恋愛ではなく、憧れだということに気づいているため、シカマルが

好き。
そのうち、シカマルと付き合うように。
のちに、暗部に入るかも？

うちは　　サスケ
うちは一族の息子。
うちはイタチの弟。
写輪眼は開眼していない。
お兄ちゃん大好きっこで、よく一緒に修行している。
原作では、兄に復讐しようとしていた。暗部に入るかも？
現在、五歳。
第七班のメンバー。

春野（ハルノ）サクラ
表向きは、サスケが大好きな女の子。
でも実は、暗部の医療忍術を専門とした隊の隊長で、綱手様をも超える、怪力の持ち主である。
当初、実際はサスケの事を好きな訳ではなかったのだが、何時の間にか思い合うように。
というより、サスケに惚れられた。
紫衣榎とは暗部での同期で妙に大人びている。
キャラ崩壊？
暗部名は瑠璃（るり）。
第七班のメンバー。

はたけ　　カカシ
第七班の隊長。
いつも遅刻して来るので、「遅刻魔」と第七班メンバーからは呼ばれている。
四代目火影の弟子。

写輪眼を使うことでついた二つ名が、『コピー忍者のカカシ』。
零総隊長（シイカ）、零元総隊長（こちらも紫衣榎です）のことと、朔総隊長（ナルト）のことを尊敬している。元暗部で暗部名は白夜（びゃくや）。

他にも下忍や中忍、上忍など、メンバーはいますが、基本的にはこの八人でやっていきたいと思います。

補足

瑜蘿（ユラ）　藍蘭（アイカ）
紫衣榎と愛葱（紫衣榎の双子の妹）の母親。
前の零尾の人柱力の娘でもある。
ナルトの母親クシナと父親ミナトとは仲が良く、同期で、サスケの母親ミコトとも仲が良かった。
紫衣榎が四歳の時に殺されてしまう。

瑜蘿（ユラ）　觜依（シイキ）飢
紫衣榎と愛葱の父親。
ナルトの父親ミナトとは、幼馴染で同じ班だった。
ミナトと、ナルトの母親クシナとは同期で仲がよかった。
紫衣榎が四歳の時に殺されてしまう。

四代目火影＝波風ミナト
二つ名　黄色い閃光
うずまきクシナ＝波風クシナ
二つ名　赤い血潮のハバネロ（笑）
二人はナルトの両親です。

第一章　其の弐　いざ！火影邸へ！！前編

今現在、火影邸前です。
何故こうなったのかというと、私の任務報告するついでに、ナルトの暗部入隊を話しておこう・・・ということで、現在に至るのです。

「ナルト。」
「なんだ？」
「窓から入ろうか。」
「・・・構わねぇけど、それっていいのか？総隊長として。」
「ううん、よくない。」
「だと、思った。じゃあ、飛ぶか。」
「ナルトって飛べるの？」
「あれぐらいの高さなら。」
「そうなんだ。じゃあ、飛ぶね。」
「うお！先飛ぶのかよ！」
で、二人が行き着いた先は火影がいる部屋の窓。

そして、目の前に座っているのが三代目火影である。

「・・・二人とも。窓から入って来てはいかんとあれほど言っただろう。」

「ナルト、窓から入って来たことあるの？」

「ある・・・っていうか、毎回。」

「・・・そうなんだ。」

「・・・わしの話を聞け。」

「・・・聞いてましたよ？だから、流れ的にナルトに聞いたんじゃないですか。」

「・・・まぁよい。して、零。それとも、紫衣榎でよいのかの。」

「紫衣榎で結構ですよ～。」

「・・・任務報告を。」

ぶっ！！

三代目が呆れてる！！

「湯瀬（ユゼ）の大名、およびその護衛の忍を抹殺しました。」

「・・・そうか。
毎回毎回、服に返り血一つ付けんとよく任務を達成させるものじゃ。
」
「それは褒め言葉として受け取っておきましょう。それで三代目。
お話があるのですが。
なんじゃ。」

紫衣榎はついさっきのナルトの会話を話した。

「して、紫衣榎が修行を付け、暗部にいれると・・・。」
「はい。だめでしょうか。
私はナルトには十分その素質があると思っています。
その力を引き出すことができますし、暗部に入れることが一番かと。
」
「・・・・・・。」
「・・・三代目はナルトを暗部に入らせることが気に入らないんですよね。」
「・・・修行をつけることに異議はせん。
ナルトの力は膨大じゃ。これからのことを考えてもその方が良いだろう。
じゃが、暗部に入れることはあまりにも危険すぎる。」

「・・・えぇ、分かっています。
でもだからこそ、実践で身につけたほうがいいと思うんです。
もちろん、暗部に十分入れるという実力を持たすまでは私がしっかり修行をつけますし、暗部に入ってからも任務を同じにしたりと気にかけるつもりですから。」

「・・・・・・・。」

「・・・なら、ナルトに聞いてみましょうか。」

ちょっと強引だけど、

「ナルトはどうしたい？」

「・・・・・・もちろん、強くなりたい。紫衣榎と腕が並ぶくらい強く。」

またいいとこ言ったねぇ？

「それに、木の葉を守るためなら暗部にだって入る。それが俺が唯一里の為にできることだと思うんだ。」

「「「！！」」」

・・・たとえ、自分が虐められても、里の為にできることをすると断言できるなんて・・・。
やっぱり、どこの世界のナルトでも、根本は一緒なんだなぁ。

「・・・分かった。これ以上言っても聞かんじゃろ。しっかり、紫衣榎に絞られるんじゃぞ？」

「わかってる。」

「三代目、それともう一つ。
ナルトが修行するにあたって、ナルトの九尾のことを話しておいたほうがいいのでは？」

「！それはならん！」

三代目、あなたは激情型ですか？

「・・・三代目、今言わなければ、これからナルトは自分が何者か知らずに生きて行くことになります。
まぁいずれ、真実を知ることになってしまうでしょうが。
でも、事前に知っていることと、突然のこととではショックの差が違うと思うんです。
優しい嘘を通し続けれるのなら私は何も言いません。
ですが、いつかはバレるんです。なら、先に残酷な真実を教えておいたほうがいいと思いませんか。」

「・・・・・・。」

「・・・なぁ、それって化け狐ってのと関係あるんだろ？」

「・・・うん。」

つーか、そのまんまだけどね。

「なら、知っておきたい。訳もわからず言われるのは、もう嫌なんだ。
ジッちゃん！」

「・・・・・・はぁ、分かった。
しかしちゃんと説明しなければならんぞ。」

「分かっています。」

「信用しておる。
それと・・・九尾を抑え込めるようにナルト自身を鍛えてほしいいんじゃが。」

「私に何処まで出来るかは分かりませんが、全力を尽くします。」

「任せたぞ。」

「ってことで、ナルトの両親については話せないけど、九尾のことについてはちゃんと説明するから。」

ーーーーーーーーなんだ？この静けさ・・・。

「・・・ちょっと待て、紫衣榎。」

これかーーーーー。

「・・・やっぱり先に帰っててくれる？
九尾のことはナルトの家で話すからさ。三代目が話があるみたい。
あっ大丈夫！ナルトの家は知ってるから！」

何で知ってんだ？とツッコミをいれた方々。
まぁ、知ってるんですよ（笑）

「・・・分かった。
・・・あぁ、そうだ。これ。」

「？何これ？何処の鍵？」

「俺の家の鍵だ。これで入ってくれ。」

「！ありがとう！」

うん！純粋に嬉しい！

「じゃあ、帰ってるから。」
「気をつけて！」
「気をつけるんじゃぞ。」

ん、火影邸からでたね。
さ、三代目が睨んでるし、話を聞きましょうかね。

「それで、なんですか？三代目。」
「・・・ナルトの親については機密事項じゃ。」
「えぇ、知っています。」
「それを知っておる口振りじゃったのでの。」

あぁ、そういうこと。
つまり、珍しく口を滑らしちゃった訳ね、私。←珍しくなのね。

「・・・実際、知っていますから。」
「！何処で知ったのじゃ？」
「・・・三代目にはもうそろそろ言うべき頃なのかもしれませんね。
」

「・・・どういうことじゃ。」

あ、三代目、私が他里のスパイと疑ってるわ（笑）

「その前にこの部屋に、結界を張らせてください。誰にも聞かれたくありませんので。」

私は結界を張った。
中の音は外には聞こえない。
つまり、防音のものだ。
ってそんなのあったっけ？
（あるということにしといてください。）
・・・ただ、一人は聞き耳立ててるから、聞かせてあげましょうか。

「では、お話しします。
実は私、異世界から来たんです。
あ、でも、私からしたらこの世界が異世界なんだけど。」

三代目が口を開けてパクパクしてる。
開いた口がふさがらないとはこの事だね。

「何処から説明したらいいのか・・・。
まぁ、順を追って説明します。

私は先程、異世界から来たと言いました。
と言っても、身体ごと来た訳ではありません。精神だけがこの世界に来たんです。」

「・・・体、つまり、肉体をおいて来たという事かの。」

「そういうことです。
私は元の世界で事故に会い、この世界に飛ばされました。」

元の現代なら、トリップで通じるのに・・・。

「今頃、私の元の肉体は死んでるか、意識不明の重体ですかね。」

と、笑って言ってやった（笑）

「・・・・・・。」

「あの、呆れないでくださいよ。
話は戻しますから！」

「・・・話してくれ。」

「それで、ちょうどその時に「今」の私の肉体の母が、私と私の双子の妹を産んでいたんです。
そして私は、姉の方の肉体（からだ）に入ってしまったんです。」

「成る程。
では、本題に入ろうかの。
その「異世界から飛んで来た」という話が本当だったとし、それがナルトの親に何の関係があるのじゃ？」

「・・・・・確かに何の関わりもないように思えますが、私の話を信じるか信じないかはともかく、聞いていただければその疑問は解決されると思います。」

「そうか。では、話を聞く前に一つ質問じゃがいいかの。」

「何ですか？」

「紫衣榎の両親・・・といっても今の『肉体』の両親にはこのことを話したのか？」

「・・・・・はい、話しました。
ですが異世界から来たとはいえ、肉体は赤ん坊ですからすぐにとはいきませんでしたけどね。
話せるようになった頃に、全て話させていただきました。」

「信じてもらえたのかの。」

「最初は信じてはもらえませんでしたけど、父様が実際に経験した出来事について話したんです。」

「その話した出来事とは？」

「それは後々説明しますから。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2047ba/

私って、、、事故ってNARUTOの世界に来ちゃいました！？

2012年1月6日04時45分発行